

兵庫教育大学言語表現学会

2025年度研究発表会・第45回総会

プログラム・要旨集・総会資料

期日：2025年12月 7 日（日）

会場：兵庫教育大学 共通講義棟

兵庫教育大学言語表現学会2025年度研究発表会・第45回総会

会 場:兵庫教育大学共通講義棟102・104・106・108

主 催:兵庫教育大学言語表現学会 (<http://gengo-hyogen.org/wp/>)

後 援:兵庫教育大学

参加費:無料

・受付(10:00)共通講義棟1階ロビー

・研究発表(10:30-14:00)[1件につき研究発表25分+質疑応答10分]

・第1会場=共通講義棟102教室

1	10:30-11:05	陳 思	気象現象に関する比喩表現の日中対照分析
2	11:10-11:45	DINH THI VIET HIEN	日越語の色彩語を含む感情表現の対照分析
	11:45-12:45	昼休憩	
3	12:45-13:20	山口雄嘉子	小学校高学年の語彙力向上指導に関する研究ー「漢字運用力」を軸とした指導モデルの構築ー
4	13:25-14:00	井口加奈子	高等学校における認知的共感を目的とした古文学習

・第2会場=共通講義棟104教室

1	10:30-11:05	宮下夏帆	日本語英語比較対照にもとづく小学校における英語音声の指導に関する考察
2	11:10-11:45	前田顕亮	小学校外国語科における学習者エンゲージメントと教師の支援
	11:45-12:45	昼休憩	
3	12:45-13:20	レイモンド恵子	小学校外国語科における「学習のための評価」に基づく児童の変容の研究
4	13:25-14:00	南村晃稀	中学2年生を対象としたエデュテイメントを用いた英語スピーキング指導の実践

・第3会場=共通講義棟106教室

1	10:30-11:05	持田魁人	外国語学習における協同学習が小学生の動機づけに与える影響ー動機づけの低い児童に着目してー
2	11:10-11:45	西脇陽介	単元の終末段階において学習者の世界観の再構成を促す説明的文章の学習指導ー言葉の原理や機能としての「文脈」を授業デザインの核としてー
	11:45-12:45	昼休憩	

3	12:45-13:20	伊藤雅人	文学教育におけるマルチモーダル・アプローチの研究 —サウンドノベル制作を通して—その②
4	13:25-14:00	楊 茜茜	日本語教育における新たな新聞活用の研究—中国人指導の実践—小中での読み書き指導の連携の提案—

・第4会場＝共通講義棟108教室（オンライン発表）

1	10:30-11:05	山岡瑠菜	高等学校国語科における生成AIを用いた授業モデルの開発—視覚化を通じた文学的読解の深化を目指して—
2	11:10-11:45	押見朋樹	中学校の英語長文読解におけるパラグラフの概念を用いた速読の効果的な指導法の考察
	11:45-12:45	昼休憩	
3	12:45-13:20	永田真惟	中学校英語科の即興的なやり取りにビデオ通話を与える影響—発話の正確性・流暢性と英語スピーキングの不安感に焦点を当てて
4	13:25-14:00	野村佑吉	中学校英語におけるシンセティック・フォニックス指導の実践—小中での読み書き指導の連携の提案—

・総 会（14:20-14:50）共通講義棟106教室（第3会場）

・講 演（15:00-16:30）共通講義棟106教室（第3会場）

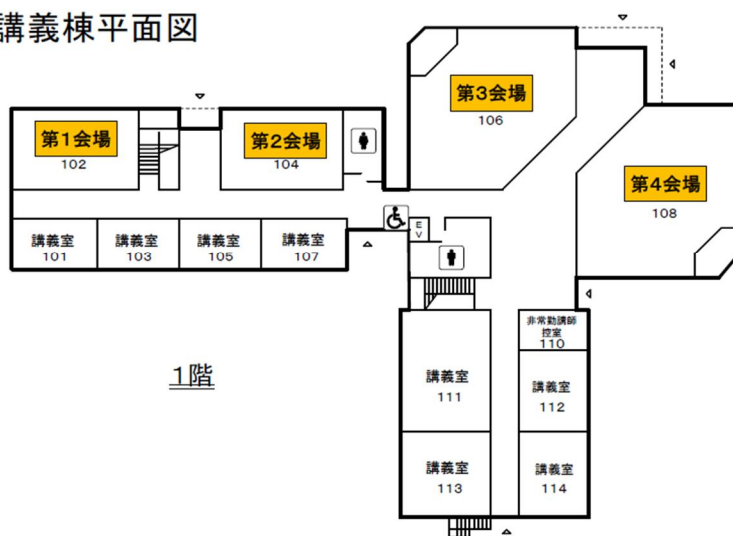
演題 「異文化コミュニケーション：AI，文学，映像作品から学ぶ」

講師 立教大学名誉教授 鳥飼玖美子先生

・閉 会（16:30-16:40）共通講義棟106教室（第3会場）

・懇親会（17:00-18:30）学生食堂

共通講義棟平面図



気象現象に関する比喩表現の日中対照分析

兵庫教育大学大学院言語系(国語) 陳 思

本発表の目的は、現代日本語において気象現象に関するメタファー表現を考察対象とし、メタファー表現が文化や社会とどのように関連するかを意味論的に分析するとともに、中国語との対照分析を行うことにある。日本語のメタファー表現には、日本の社会習慣や気候的特徴が反映される部分があり、メタファー表現を丁寧に分析することによって、メタファー表現と日本の社会や風土との関係を探ろうとものである。

本発表で取り上げる気象現象は、「晴れ」「曇り」「雨」「光」の四つであり、データはコーパスから抽出する。先行研究においては、「晴れ」「曇り」「雨」を個別に取り扱うのみで、一元的に分析したものではなく、「光」に関する中日対照分析は行われていないことから、本発表では、これらの気象現象に対して、隠喩・換喩・提喩の三つの比喩を用いて分析した上で、中国語との対照研究の観点から、日本語と中国語の共通点と相違点を抽出する。

日越語の色彩語を含む感情表現の対照分析

兵庫教育大学大学院言語系(国語) DINH THI VIET HIEN

本発表の目的は、日本語とベトナム語の慣用句の中から、感情に関する表現のうち色彩語を含むものを取り上げ、メタファー理論に基づき、色彩が感情概念の形成にどのように関わっているかを分析することにある。

本発表が考察対象とするのは、例えば「顔が赤くなる」のように、顔色が赤くなるという身体の動きから「怒り」や「恥ずかしい」といった感情を推論することによって成り立つ表現である。色彩語は、赤・青・黄・紫・灰色の5色を取り上げる。研究方法としては、両言語の慣用句辞典等から「怒り」「恥ずかしい」「恐ろしい」という3つの感情に関する色彩語の表現を抽出し、メトニミーによる因果関係に基づいて、色彩語と感情がどのように結びつくかを分析し、共通点と相違点は明らかにする。分析の結果、日本語とベトナム語の共通点は身体的経験に基づいて色彩語と感情が結びつくところであり、相違点は文化的背景に起因して色彩語と感情が結びつくところであった。

小学校高学年の語彙力向上指導に関する研究—「漢字運用力」を軸とした指導モデルの構築—

兵庫教育大学大学院言語系(国語) 山口 雄嘉子

本発表は、小学4～6年生を対象とした語彙力向上指導を目的とし、漢字活用学習を通じて語彙の質的充実を重視した学習活動の有効性を検討するものである。学校教育における語彙・漢字指導は、語彙については量的拡大から質的充実へ、漢字については字形習得偏重から意味理解・活用重視へとそれぞれ転換が求められているが、現状では定着しているとは言い難い。そこで本発表では、日本語の意味的側面を担う漢字に着目し、「漢字運用力」の観点から語彙力深化の可能性を探究した。方法としては、小学校での語彙・漢字指導の現状を概観した上で、実践授業において同義文への書き換え活動を行い、児童の記述における語句選択を分析した。その結果、漢字の意識的活用が語彙ネットワークの変容に寄与し、語句の多様性や視認性の向上に関する理解の深化が確認された。以上より、漢字を基盤とした語彙指導が質的充実を促進する有効な手立てとなることが示唆された。

高等学校における認知的共感を目的とした古文学習

兵庫教育大学大学院言語系(国語) 井口 加奈子

本発表の目的は、高等学校における古典教育、特に古文学習を考察対象とし、認知的共感という観点から古文学習の意義と効果的な学習方法について検討を加えることにある。古典教育の必要性は問われて久しいが、近年は多角的に学習の意義が論じられている。本発表では、古文学習の目的の一つに認知的共感という観点を加え、文学史事項の活用と歴史教育における共感学習の手法の援用によって作品外側世界に意図的に視野を向けさせ、学習者に古文学習の意義を感じさせる学習方法の構築を試みる。議論の手順としては、まず、日本における古典学習の問題点と共感に関する先行研究を概観し、作品外側世界の取り扱いの重要性と有効性を明らかにする。次に、作品外側世界を意識する手法として、文学史事項と、視点と視点の相対性を意識させる問いの活用の可能性を探る。その際、歴史教育における共感の手法の援用可能性について考察する。

第2会場 104教室

日本語英語比較対照にもとづく小学校における英語音声の指導に関する考察

兵庫教育大学大学院言語系(英語) 宮下 夏帆

英語の「カタカナ読み」の脱却に向け、英語の強弱を意識した発音を指導すべく、小学校5・6年生を対象に「英語らしい発音」とは何かに関する授業実践を行った。

まずは東京アクセントと関西アクセントを比較することで日本語の発音には高低があることを意識させ、次に日本語の「バスケットボール」と英語のbasketballの発音の仕方に違いにふれた。日本語は高低アクセント、英語は強弱アクセントであることを認識させた上で、英語の強弱を意識した発音(音読)練習を行った。また、児童の英語の発音を授業の前後でそれぞれ録音し、音声解析アプリPraatでその変化を分析した。

本研究では、授業実践や授業前後の発音の分析をふまえた、小学校外国語科における「英語らしい発音」の指導のあり方について考察する。

小学校外国語科における学習者エンゲージメントと教師の支援

兵庫教育大学大学院言語系(英語) 前田 顕亮

本研究では、小学校外国語科において、教師の支援が児童の基本的心理欲求の充足やエンゲージメントの向上にどのように影響をもたらすのかを明らかにすることを目的とした。対象は小学校6年生27名であり、2025年5月20日から6月26日にかけて12回の授業を行った。授業では、基本的心理欲求理論に基づき、自律性・有能性・関係性の各欲求充足を支援するため、それぞれの観点に応じた手立てを取り入れ、児童のエンゲージメントを高めることを目指した。初回と最終回に質問紙調査を実施し、3欲求の充足および行動的・感情的・認知的・社会的エンゲージメントの変化を分析した結果、いずれの得点にも有意な上昇が見られ、教師の支援が児童の積極的な学習参加を促す可能性が示唆された。現在、量的な分析に加え、児童の自由記述をもとに、教師の支援と基本的心理欲求の充足やエンゲージメントの変化との関係の質的な分析を行っているところである。

小学校外国語科における「学習のための評価」に基づく児童の変容の研究

兵庫教育大学大学院言語系(英語) レイモンド 恵子

本研究では主体的に学習を進める児童の育成を目的とし、その手がかりを「学習のための評価(Assessment for learning)」に求めた。Wiliam & Black(2009)の「学習のための評価」に基づく5つの方略目標を授業づくりのフレームとして用い、5年生児童(3クラス88名)を対象に12週間かけて外国語科の2つの単元の授業実践を行った(現在も進行中)。5つの方略目標の中には、目標と評価規準を教師が共有し児童が理解することが示されているが、本研究においては、それらを教師と児童が共同構築することにした。児童の変容を分析するために、開始、中間、終了時に実施したアンケート、各単元の終了時における児童のふりかえり、授業録画、授業者のノート記録などをデータとした。実践が現在進行中であるため、現時点で児童の変容について総合的に述べることはできないものの、2回のアンケートの結果の分析から、一部の方略目標において有意差が検出された。また、1つ目の単元終了時に書いた児童のふりかえり記述は、現在分析中である。本発表では、ここまでの分析結果をもとに、主に実践前半における児童の変容を報告する。

中学2年生を対象としたエデュテイメントを用いた英語スピーキング指導の実践

兵庫教育大学大学院言語系(英語) 南村 晃稀

中学校英語科において、多くの生徒が英語を話すことに対して不安感や抵抗感を抱き、積極的に英語を話そうとしないことが近年課題となっている。そこで本研究では、「教育」と「娯楽」を組み合わせた「エデュテイメント(edutainment)」を用いた英語スピーキング活動を実施した。具体的には、NGワードを使わずにお題の英単語を英語で説明し、相手に当ててもらうカードゲーム「ナシゴエイゴ」を使用した。カードをレベル別に分け、約1か月間にわたって、やり取りに重きを置いた群と、発表に重きを置いた群の2群に分けて活動を実施した。実践の前後における、生徒の「話すこと」に対する情意面の変化をアンケート調査によって測定し、群間で比較検証を行った。その結果、いずれの群でも「ナシゴエイゴ」を用いた活動において、生徒が積極的に英語を使用する様子が見られ、英語を話す力が上がったと感じた生徒も半数ほど見られた。

第3会場 106教室

外国語学習における協同学習が小学生の動機づけに与える影響

—動機づけの低い児童に着目して—

兵庫教育大学大学院言語系(英語) 持田 魁人

本研究では、外国語学習に対する動機づけの低い児童を中心に、児童の動機づけを高めることを目的に、協同学習の考えに基づいた授業実践を行った。そして、外国語学習における協同学習によって、児童の動機づけは高まるのか、また、児童の動機づけの向上に大きな影響を与える要素(可能性・自律性・関係性)は何か、さらに、協同学習におけるグループダイナミクスが個人の動機づけにどう影響を与えるかを、動機づけの低い児童と高い児童の差異を踏まえて検討した。小学生78名を対象とした質問紙調査において、動機づけの低い児童の動機づけが有意な向上を示したこと、可能性と自律性が有意に正の影響を与えていることが明らかになった。また、協力して活動に取り組み自然に意見を言い合えるような安心感のあるグループ、互いに助け合い高め合えるグループ、自己開示し感情を共有できるグループでは個人の動機づけが高まることが明らかになった。

単元の終末段階において学習者の世界観の再構成を促す説明的文章の学習指導 —言葉の原理や機能としての「文脈」を授業デザインの核として—

兵庫教育大学大学院言語系(国語) 西脇 陽介

本研究は、説明的文章の学習指導において、言葉の原理や機能としての「文脈」に着目し、学習者の世界観の再構成を促す授業デザインの有効性を検証することを目的とする。

説明的文章の学習指導では、文章構成や説明の仕方など形式面の指導に過度に偏ることへの批判が繰り返されてきた。先行研究では、学習者の認識の更新を目指す試みも見られる一方で、言葉の原理や機能に着目して授業をデザインし、筆者の発想を捉え、学習者の認識更新を促す知見の蓄積は十分でない。

そこで本研究では、「文脈の構成要素」を整理し、「固有種が教えてくれること」(光村・小5年)の教材特性を踏まえて、構成要素の一つである「社会的環境」に焦点を絞った単元をデザインした。実践では、社会的環境の理解と筆者文脈理解との往還を通して、学習者が自身の世界観を再構成する姿が見られた。文脈を観点とした授業デザインが、世界観の再構成に資する可能性が示唆された。

文学教育におけるマルチモーダル・アプローチの研究—サウンドノベル制作を通して—その②

兵庫教育大学大学院言語系(国語) 伊藤 雅人

本研究は、現代における文学のマルチモーダル化という課題意識のもと、文学構造を多層的に理解する力の育成を目的とする。町田(1994)のサウンドノベルを用いた文学実践を基盤とし、GIGAスクール端末を活用して、文学教材をデジタルゲームの一ジャンルであるサウンドノベルへと翻案した。文学作品を原作に忠実にデジタル化した段階を「第一段階」、物語の分岐や展開を付加した段階を「第二段階」とし、本発表では主に第二段階の実践を報告する。学習者が物語構造を能動的に再構築する過程から、文学理解の深化と創造的表現の広がりを考察する。

日本語教育における新たな新聞活用の研究—中国人高校生を中心に

兵庫教育大学大学院言語系(国語) 楊 茜茜

本研究は、日本語教育における新聞活用の新たな可能性を、中国人高校生を対象として探るものである。従来の新聞活用は、主に読解力や語彙力の向上を目的としてきたが、本研究では、新聞記事に含まれる生活文化の要素に着目し、文化理解や思考力の育成にどのような効果があるかを検討する。具体的には、日本の生活文化を題材とした新聞記事を教材として使用し、学習者が自国との文化的違いを比較しながら理解を深める学習活動を設計・実施するつもりである。予想の結果、学習者は日本語表現への関心を高めると同時に、異文化理解の視点を広げる傾向が見られる。これにより、新聞は単なる言語教材ではなく、文化的気づきを促す教育資源としての有効性を持つことが示唆されることが考えられている。本研究は、言語教育における新聞活用を「生活文化の学び」と結び付ける新しい方向性を提示するものである。

高等学校国語科における生成AIを用いた授業モデルの開発 —視覚化を通じた文学的読解の深化を目指して—

兵庫教育大学大学院言語系(国語) 山岡 瑠菜

本研究は、高等学校国語科における読解力育成の課題を背景に、生成AIを活用した視覚化活動による文学的読解の深化を目指して授業モデルを構築・実践したものである。序章ではICT活用の現状と国語科の課題を整理し、生成AI導入の意義を明確化した。第1章で生成AIの定義・教育的可能性・課題を検討し、第2章で読解活動における「視覚化」「外化」の理論的意義を考察した。第3章では、村上春樹『鏡』と中島敦『山月記』を教材に、ポスター制作活動を中心とした授業モデルを設計した。第4章では兵庫県と京都府の高校で実践し、Copilotによる画像生成を通じて、読解内容の具体化、表現力の育成、対話的学びの促進が確認された。第5章では、技術的制約や評価方法の課題を整理し、終章で他作品への応用、他教科との連携、AIリテラシー教育との統合など今後の展望を示した。本研究は、生成AIを補助的ツールとして位置付け、国語科における主体的・対話的で深い学びを支える新たな授業モデルの可能性を提示するものである。

中学校の英語長文読解におけるパラグラフの概念を用いた速読の効果的な指導法の考察

兵庫教育大学大学院言語系(英語) 押見 朋樹

私は学部4年次の中学校実習で3年次のクラスを担当し、生徒の実態として特に長文読解を苦手としていることが分かり、この長文読解に対する苦手意識を解決するための効果的な長文読解指導に興味を持った。また、苦手とする理由として、読み方が分からない、単語が分からないなどの意見が挙げられ、その対応策として速読法を活用できないかと考えた。また、中学校段階の生徒の実態に応じた長文読解指導においては推論などの語順や品詞といった言語知識が必要な読解法よりも文章構造等の理解が必要であると考えた。そこで、中学校2年次を対象に行った教育実践では、帯活動で計10分間の長文読解を行い、パラグラフリーディングを導入した。また、比較として他2つのクラスでは速読法の内容の推測とスキミング・スキニングの指導を行った。そして、本実践の読み速度や意識の変化等の結果から、本研究では速読法におけるパラグラフを意識した効果的な指導法の考察を行う。

中学校英語科の即興的なやり取りにビデオ通話が与える影響— 発話の正確性・流暢性と英語スピーキングの不安感に焦点を当てて

兵庫教育大学大学院言語系(英語) 永田 真惟

近年、中学校英語科では、相手と考えや気持ちを即興的に伝え合う「やりとり」活動が重視されている。しかし、これまでの研究から、即興的な発話の場面が不安や抵抗感を増大させ、発話のパフォーマンスに影響することが示唆されている。一方で、ICTを活用したビデオ通話による対話活動が、距離を保ちながら安心して発話できる環境を提供し、不安を軽減するという報告もある。そこで本研究では、即興的なやり取り活動における不安を軽減することを目的とし、中学3年生を対象に、対面形式またはビデオ通話形式で1分間の即興ペアトークを継続的に行い、正確性・流暢性・不安感の変化を比較した。スピーキングテストとアンケートの結果から、ビデオ通話形式では正確性の向上および不安感の軽減がより大きいことが示された。

中学校英語におけるシンセティック・フォニックス指導の実践 —小中での読み書き指導の連携の提案—

兵庫教育大学大学院言語系(英語) 野村 佑吉

本研究は、中学校英語における「読むこと・書くこと」の指導として、シンセティック・フォニックスを実践し、生徒の音韻認識を高めながら、音と文字・綴りの対応関係の理解を育成することを目的とする。公立A中学校の1年生を対象に、シンセティック・フォニックスの教材「ジョリーフォニックス(JP)」を用いて、4月の始めから5月にかけての6週間で、JPの42音指導及び同音異綴りを含む単語・サイトワーズの指導を行った。指導の効果を確認するために、名称読み・音読み・無意味語の読み書きに関する事前事後テストを実施した。結果として、音と文字の対応力や音の操作(ブレンディング・セグメンティング)に一定の効果が見られたが、得点分布には個人差が残り、特にダイグラフや語レベルでの読み書きにおいて顕著な差が確認された。これらを踏まえ、小中接続を意識した指導方策として、単語・フレーズの読みの自動化と流暢性を高める活動や、デコーダブルブックの活用を提案する。

講演

異文化コミュニケーション: AI, 文学, 映像作品から学ぶ

立教大学名誉教授 鳥飼 玖美子 先生

本講演では、外国語教育の目的は異文化コミュニケーションであるという視座から、文学作品、映像作品、そして生成AIを論じる。

言葉がコミュニケーションに使われる際には文化が密に関係するが、それが意識されることは希であり、異文化コミュニケーションを成功させる為には学習が重要である。その為の手立てとして、身近な作品から人間が行うコミュニケーションの本質を見極め、人間との根本的な違いを認識した上で生成AIの活用を考えてみる。

* 総会資料は、会員の方にのみ会場にて紙媒体で配布します。